

義太夫

新年に寄せて

義太夫協会会長 田 辺 秀 雄

義太夫協会会報

第47号

平成2年1月1日

社団法人 義太夫協会発行

〒104 東京都中央区銀座

6-18-2 新橋演舞場B2

TEL (541) 5471

明けましてお芽出度う御座います。昨年中は種々とお世話になりましたが、本年も宜しくお願い申し上げます。

さて昨年を振り返りますと、何と云ってもこの協会にとって大きな出来事は毎月定期公演を行ってきた本牧亭が閉鎖されるに至ったことでありましょう。このことに就いては前号に書きましたから省略します。淋しいことかも知れませんが、禍を以て福となすの例で、本年はこの新しい会場で大いに張り切って演奏をして欲しいと思います。

ですが協会のこれからの重大な関心事は義太夫界を如何に発展させるかということです。大正から昭和の初めにかけて東京に於ける義

太夫の師匠の数は長唄と同じであったということをも物の本で見ました。戦後の混乱で邦楽は一時衰退しましたが、世間が落ち着くと民族的なものに関心を持つ者も多くなり、次第に普及し掛けて来りました。特に長唄や、三曲の社会は昔程とは行かずとも華やかになっています。語り物の世界はどうも少し立ち遅れの感があるようです。それは一つには若い世代に知られていないということにあると思われま

す。流行している芸界では皆若いスターが生まれているようです。そうしたことを踏まえて、師匠方は御自分の芸を若い弟子に十分に伝えて欲しいし、この曲はその人に向かないから

と消極的にならず、何でも消化するのがプロですから出来るように大いに努力して下さい。そうすることによって貴方の芸は次の世代にも立派に生きるわけです。この協会の基礎は保存会即ち、人間国宝の団体指定によつています。それは義太夫節を永く保存し発展させるという文化的使命を帯びています。ですからそういうことを会員はよく自覚して欲しいと思います。

またその為には義太夫の愛好者即ち底辺を広げることが必要です。聴く人が多くなれば語ったり弾いたりしたいという所謂素義も多くなり、師匠もまたプロを目指す人も多くなります。義太夫で何とか飯が食えるようになります。それは私達も考えています。その為には皆で一致協力して、これの実現に向かって欲しいと思います。年頭の辞とします。



ドーブル!! どうする?

—女流義太夫が国立演芸場へ

名誉会長 吉川英史

「ドーブル、ドーブル」は、昔の女義太夫のファンが絶叫した感激の掛声であった。ところが、その「堂摺連」の二代目か三代目のファンは、頭をかかえて「どうする、どうする?」と心配する危機が訪れた。女流義太夫の定席上野の本牧亭が本年限りで閉鎖されることになったのである。

しかし、「捨てる神あれば、助ける神あり」で、国立劇場と文化庁のご厚意により、国立演芸場を貸与されることになった。(従来通り、毎月二十日、二十一日。但し、土曜日に当たる日は休演)

こうなると、本牧亭の閉鎖は、女流義太夫の発展を促す好運を与えたことになる。なぜなら、義太夫は好きでも、座るのが苦手な人たちが、椅子席の国立演芸

場なら、「待ってました」とばかりに押しかけるからである。

義太夫は劇音楽である。一種のオペラである。本来は、武士も町人も、男も女も、老人も若者も、一人で演じ分ける「モノ・オペラ」である。しかも、女流義太夫では、当然ながら、光秀も由良之助も女が男になり切って演ずる。こんなオペラが世界のどこにあるだろうか!? 歌舞伎の女形が日本演劇に咲いた美しい花であるように、女流義太夫の「男芸」の表現も世界に類例のない演劇技法である。

ゆっくりと、椅子にかけて鑑賞されたい。(国立劇場発行「あぜくら」平成元年12月号より転載させて頂きました。)

本牧亭

ありがとう(一)

昨春秋以降、本牧亭では「本牧亭ありがとう」と銘打った催しが続きました。講談・落語・新内・琵琶・浪曲、そして女流義太夫と素義(素人義太夫)……

十一月二十一日、本牧亭お名残公演第五弾は「特集・本牧亭ありがとう」本牧亭のおかみさん・石井英子氏と、教室より本牧亭に座っているほうが長かったという池田弘一神田外語大学助教授をゲストに迎え、竹本土佐廣・竹本越道・竹本綾之助各師に思い出等話して頂きました。当日の模様を一部お伝えいたします。

池田氏の「下足札で炭団の火を掻きおこすので、昔は下足札の角が焦げていた」などという思い出は、入り口で下足札を受け取る時首をかしげて「これ何ですか? 座席の番号ですか?」といわれて説明が必要になっていた昨今、記憶するに値する話でした。本牧亭の廃業で疊敷の席が消えると、下足札という言葉も、「お膝おくり」などという味わい深い言葉も問もなく消えてしまう運命なのでしょう。席上、石井英子氏に、人間国宝・竹本土佐廣師から、義太夫協会よりの感謝状と花束が手渡されました。



左・竹本土佐廣師 右・石井英子氏
(撮影 高野俊雄氏)

石井英子さんの話

感謝状を頂くというのは、本当に心苦しいんで、むしろ私が義太夫の皆さんに出演して頂いたことがどんなにうれしかったか……と申しますのは、私が子供の頃に、向う側に鈴木さんがいましたけど、素雪さんってお師匠さんがいらっしやいました。その方がちょっと母に似てるんです。で、大変かわいがって頂きまして、「おしろいつけてあげるからおいでよ」っていうと、その当時、今はもう見かけませんが、鬼の手でおしろい、練りおしろいをつけて貰った記憶があります。西片町の鈴木っていうのを、私のおばがや

っておりまして、その時に初代綾之助さんが大変評判だった、そういう方が出たって話も聞いておりますし、震災後の鈴木本のお煙室には綾之助師匠の写真も出ておりました。父から「この人が綾之助さんだよ」と、聞かされておりました。

私、芸には余り耳を持っておりませんけれども、おかげさまで、うち(本牧亭)で皆さんが出演して下さるので、いろいろなものが聴けて、本当に有難いと思っております。

土佐廣師の話

最初の内は四日づつでした。二代目綾之助さんのお弟子をつれてここ(本牧亭)で正月に出られたのが、確か一番はじめでございました。しばらくそれでやってらっしゃいましたけれども、あんまり御客様が思わしくないの、みんなポツポツあっち誘いこっち誘いして、しまいに皆出るようになってしまいました。なかで、誰かが松竹梅にしたらいいでしようって、それでもまだ余って、藤組を作って四日間になりました。代り代りにやりました。

猿幸さんのいらっしゃる時は必ずキリでやらせて頂きました。入船堂の御主人さまなんかは耳がこえてらっしゃいまして、少々し抜いても、一字抜いても御存じでね。「今日はちょっと抜かずにはやらないで喜んでらっしゃる訳で、もう二・三人そういう方もいらっしゃいましたけど、悲しいかな、みんな亡くなってしまいました。

越道師の話

本牧亭さんでずーっと四日間ございました。頭に、私が判官で重之助さんの姉さんが由良之助をやって下さいました。その時、(舞台を)下りたとたんに「越道さん、今日は私ホロッとしたわよ」……その一言、私はその一言がうれしくて、気が入るってこういうことかなと思つて。

二代目綾之助さんは、熱心な人でね。本牧亭の一番最初の世話人さんで、今日これだけ続けてこられたのも、お師匠さんのおかげだと思えますね。出る方がなくなると弟子さんをみんな引張ってネ、一座みたいな格好で、みんな出る出るって。世話人は、憎まれたり色々せにやなりません。いちいちあゝだこうだ言つたらまとまりません。

綾之助師の話

義太夫はホント難しいですね。十年やってまゝ何とかな。私もこの年になってまだまだ思うようにできない。人のばっかり好く聞かせる……

(当日は時間の関係であまりお話を伺えなかったのですが、前号でお約束した通り、土佐廣師には別途思い出を聞かせて頂きました。8頁を御参照下さい。)

新春のお笑い噺

相談役 豊澤 猿三郎



昨年は、少女誘拐、小間切、一家心中等、厭な事が続きましたが、本年はそんな事吹きとばし、笑って明るく暮しましょう。

戦前、大磯に用事があって戻り道、三味線の音に引き寄せられ立ち寄りました処、「一只今からごぜん様が始まりますから、お入りください。」とすすめられ、座敷へ入りますと、二十人程の聴き手と高座には人品のよいご老人と三味線で、下げピラには、逆巻、三味線は鶴澤善兵衛とあり、高い調子で、いきなり「たそがれ時又六を」と舟からです。

「ヤッッッッ」となると客一同も五分間ぐらい合唱。二度目のヤッッッッは、お二人とも肩衣を脱ぎ、太夫さんは置いてあった一メートルほどの鉄棒を持ち、善兵衛氏は三味線の棒を握り、大勢の声に合わせ、重量挙げ十五回くらいやった処で、ご老人が「皆さん有難うございました。又来月もお願ひ申します」と言ってお入りになり、会は終ります。帰りに入口でおみやげを頂き、戻って開いてみますと、ビール一本と酒の四合瓶とつまみ物で「長生きは酒とシシヤッッッに限りませう」と書いた紙が入って居ました。結構なお催し

と思いました。

次は私共のご連中さんで弁護士さんが居られました。お弟子さんが皆法学博士なのに、先生は法学士です。毎年、先生を福井楼へお招きして謝恩会を催します。先生が「毎年義太夫を所望されるから今年は語ってやらねばならぬから、(私に)三味線を持って隣の部屋で待って居てくれ」との事です。其の時が来ました。お弟子さんは先生が上手でない事を知っていますが、お世辞に所望するのですが、今年には案に相違「それ程所望するなら語りませう」「エッ語るんですか、それではサワリを三分くらい」「松波琵琶を一段語ります」「五分くらいですか」「一時間やります。其の間正座をする事、酒を呑まぬ事」「キヤッ」これは冗談でなく悲鳴だったのです。三人上戸の出る頃は、布団を丸めて尻へかう人、頭痛がするのカーシーンを飲む人、吐き気を催して胃散を頼む人。尤も、小桜の声は思春期のチンパンジーのような、平次の声は難産に苦しむ食用蛙の様なので、さぞ、お弟子さんは苦しかったです。

次もご連中さんで □井 □華さんが愛人の

竹本 □香さんの自殺で所轄の警察に世話になりましたが、市内でも有名な厳格な警察なので、金品を贈って罪になってはと、結局「私の義太夫を聴いて下さい、場所と時間はお任せします」と申しましたら、先方から返事がありません。其の日 □華さんは、餅屋をサワリまで語ることで暮が開きました。所長を初め十八人の警官でした。ワイワイ大声なので、□華さんの声も三味線も聞こえませんが、署長が「静かにしろッ」怒鳴りました。一座はシーンとしました。ここの署長は次には警視總監になるというジントクがあるというほど厳しい署なのです。「社長がこんな立派な料理を出して義太夫を聴いてくれと言われるのだ。少しは我慢しろ、我慢をッ」「我慢しなくてもいいですよ。義太夫やめて、皆さんと一緒に飲みましょう」本を持ってスタコロ入ってしまった。着替えて宴席へでましたら署長が居られません。女中が「部下の者が不行儀なので恥ずかしい。□井社長に謝ってくれ」と申され帰られましたとの伝言でした。後は怖いものなし、詩吟、剣舞、草津ヨイトコ、八木節、いやもう大変な騒ぎです。突然ビリビリと呼子とともに舞台のカーテンが開き、大きなラッパの付いた蓄音機と可会の女中がいます。「只今から 当家独特の南洋踊りをお目にかけます」廊下は女中や板前で満員です。やがて大きな音で「わたしのラバさん」が始まりました。廊下から顔をマツ黒に塗って、頭を美しい花で飾った男が入ってきました。一糸まとわぬ全裸です。中央に

下がった異物が両股に当たってビチャビチャ音楽によく合奏するのです。手招きをしますと今度も顔マッコロの女性クロンボです。体重は八〇キロ、背は一七〇ぐらい、巨大バインを音楽に合わせて振るのです。「横綱土俵入り」左右の足を千代の富士関の様に顔の高さに上げます。今一度申します。全裸の女です。やがて司会が踏み台を女の足へ置きます。男がビョイと上りました。男女同じ高さになりました。司会が「南洋流の熱さセツブン」男女は強く抱き合せてセツブンです。まるで水戸泉と維進力の四ツ角力です。やがて男の異物が水平になりました。「ラジオ体操腕の上げ下げ初めいッ」全員の「一、二、三、四」の号令に合わせて上に向いたり下を向いたり、まるで神技です。司会が「南洋名物を終ります。お二人さんご苦労さん」井さんもわたしもこんな見せ物を見て後のたたりを思い、急いで外に出ました。翌日井さんが昨日の勘定に行くから一緒に行ってくださいと言われるので参りました。十八人の宴会費九十何円と別に女クロンボの祝儀二円と書いてありました。「あの女の人はどういふ人なのですか」との間に「あの人は警察へ毎日弁当を入れてる仕出し屋の出戻り娘です」「男クロンボの祝儀は」「あれは自慢で人に見せたい隠し芸なんです、署長さんの。」「エッ署長さん」おとそ戴き過ぎて少し脱線しました、お許し下さい。

本牧亭

ありがとう(二)

素義お名残演奏会から

玄義(げんぎ 玄人義太夫・プロ)とは一味違う素義(そぎ素人義太夫・アマチュア)の「本牧亭ありがとう お名残演奏会」が、昨年十一月三十日に開かれました。



河野国声氏 鶴澤寛八師 (撮影 河口義信氏)

当日は、大日本素義会の、斉藤嫩・安田洋八・中島古平・松尾武市の各氏、紅一点、大阪から飛び入りの長沢静子氏、そして最長老九十二才の河野国声氏がそれぞれ大熱演で本牧亭での語り納めをされました。(湯浅光玉氏は急病欠演)

この会は、「義太夫は国の声なり」と自ら国声を名乗られる河野国声氏が、「お腹から声を出す義太夫こそ健康・長寿の秘訣」と提唱され実現の運びとなったものですが、その国声氏の義太夫が話題になっています。「菅原伝授手習鑑 寺子屋の段」を三味線鶴澤寛八師で所謂「つかみあい」(打ち合わせなしのぶっつけ本番のこと)で語られました。本牧亭の客席からも、楽屋からも、そして感激のあまり電話でも、次のような声が届いてきました。曰く、「義太夫を聴くのはまだ三日目だったが、義太夫の面白さが初めてわかった」「全身から、手の先、おヒゲの先からも、悲しみが伝わってきた」「長らく忘れていたものを思い出させてくれた」「いろは送りでは、念仏を唱えていらしたのではないかとあれが体で語るといふことなのか」等々。

確かに義太夫は語るのも聞くのも易しくはありません。奥が深く、難しい芸能には違いありませんが、決して七面倒臭い芸能ではなく、実に面白い芸能であることが実感され、なる程健康にも良いことが証明された一夜だったといえましょう。

素義の皆様、これからもどうか楽しく義太夫とおつきあい下さいように。

女流義太夫の魅力

守 美 雄

女性の語る義太夫の素晴らしさは、美学者は、どんな言葉で表現するのだろうか。

華麗美、悲壮美、昂揚美、などのこれまでの美学上の表現では一口に言い現わせない美しさがある。

文楽座の公演でも、現在では素浄瑠璃の興行は全く行なわれていない。明治時代までは文楽座の東京興行はすべて素浄瑠璃であった。

当時は、人形や大道具を輸送する費用も大変だったこともあるが、三代目越路太夫が東京の歌舞伎座で東京公演を開くと、大きな同劇場の花道まで聴衆で埋まってしまったといわれる。この頃は勿論素浄瑠璃であり、現在では考えられないほどの人気であった。

一方、東京の義太夫界も、娘義太夫ばかりでなく男の太夫の興行もかなり盛んに行なわれていた。

有名な朝太夫は、その相三味線の松太郎と共に大変な人気で市内の寄席に出演していた。この当時、後に文楽の三味線に入り名人といわれた後の道八、当時の鶴沢友松も、その頃人気があった伊勢太夫の三味線を弾いていた。そこに入門してきたのが、東京の出身で後に山城少掾の三味線を勤めた鶴沢清六で、

まだ十三才の少年であったといわれる。

市内の寄席では、娘義太夫と共に男太夫の公演が数軒の席で行なわれており、決して大阪の太夫にも劣らないといわれる芸人が揃っていた。

しかし、時代の流れと共に素浄瑠璃の興行は次第に姿を消し、文楽座の東京興行も人形をともしなわなければ、お客を呼ぶなくなってきた。関東大震災以後は、文楽座の素浄瑠璃の興行は東京では、全く行なわれなくなった。又、東京の寄席でも男太夫の素浄瑠璃はほとんど姿を消し、次第にその興行価値を失ってしまった。

しかし、女太夫の興行はまだ立派に興行価値を持っていたのである。

昭和十年代になってからも、竹本素女は、歌舞伎座に出演して「素女会」を開き、満員の聴衆を集めており、戦前までは、かなり盛んに公演が行なわれていた。

戦後に女流義太夫連盟の組織が生れ、これが四十年間続いた本牧亭の公演にまで及んできたのは、女太夫の浄瑠璃には、独特の魅力があるからなのである。

時代物の荒武者を演出する場合でも、世話

物の女性の繊細な感情を表現するにしても、女太夫の語り口には、聴衆を納得させる何かがある。それが現在まで、女流義太夫を支えてきた「花」であり、これが女流義太夫の「イノチ」なのである。

如何に優れた芸能であっても、これを理解してくる観客や聴衆がなくなつた時は、過去のものとなり、博物館に記録としておさまるだけのものである。

女太夫の素浄瑠璃の魅力は、第一に「言葉」も地合（じあい）もはっきりしており、聞き易く、判りやすいこと、又感情の表現が素直であり、陰にこもつた暗さを感じさせないことである。これが多くの聴衆に理解され、共感と呼んだものであり、現在まで興行価値を失っていない理由である。

素浄瑠璃のよさは、聴く人に豊富なイメージを湧き上がらせてくれることで、人形浄瑠璃の場合でも、太夫が非常に優れていると、人形は目に入らなくなることもある。

長い伝統を持つ我が国の語り物の集大成ともいうべき義太夫の良さを極めて純粋に表現してくる素浄瑠璃は、今まさに高座や舞台から消えようとしている。

しかし、女流義太夫は、まだその興行的な価値を失ってはいない。国立演芸場という恵まれた場を得て、大いに洗練された芸を聞かせて頂ければ、幸いである。

若い方々にも、女流義太夫の熱演は、必ず理解され、人間の美しさや生きる歓喜を味わって頂けるものと確信している。

女流義太夫共和会あれこれ (二)

事務局長 竹本 綾太夫

前号に続き、雑文を……。

昭和三十五年三月の「女義共和会」結成記念興行のプログラムに「この度本牧亭の舞台改修を期して、私共も心を新たにし(中略)別表の如く演者を五組に分け、それにフリーの人を配し、各組独自の企画を以って競演致します故、倍旧の御支援を賜わりますよう御願申し上げます。」という挨拶文に、メンバーの別表がある。

梅組 越駒・越道・駒龍・越春
 桐組 小津賀・住若・住助・敏春
 竹組 重之助・綾之助・佳照・重子
 藤組 土佐廣・素龍・綾華・京子
 松組 素八・素康・小素・素三郎
 フリー 綾作・糸三・駒千代・清可・住春・土佐子・土佐照・福弥・

素次・弥周

「三味線連名」猿玉・猿幸・駒登久・三生・勝八・新兆・清三・津賀昇・美佐尾・巴住・紋教・紋弥・呂宝、和歌吉

以上、太夫三十名、三味線十四名、計四十四名である。以後十年の間に住若・住助(昭和四十年)、素龍・綾作(同四十二年)の四人が亡くなっている。加わった人は、三十六年に仙廣さん、三十九年頃から歳栄(桐組)・

綾一(竹組)・広松(藤組)・幸純・幸治、フリーから弥周さんが桐組に入っている。更に四十三年四月からは春華・光末さんが加わった。右のメンバーで、十年の間に一寸しか出演しなかった人が八人位いるが、その他は皆さん大活躍であった。太夫では素龍、三味線では三生・駒登久・津賀昇・清三の方々が特筆ものであろう。素龍さんは、自分の組は勿論、他の組にも助っ人で出、更に定席以外の素龍会・有名会とかの会も全部出演している。三味線はもっと大変で、右の人はそれぞれ四人位の太夫がいるので、年中休み無しであった。この辺で、どのようにして番組が作られ、当日を迎えるか、ということを見て見よう。先ず、前の月の四日間の一寸前に、翌月の組の人に電話をかけ、語り物その他を聞き、欠員の時はだれを補充するかを決める。そして前の月の四日間に出演している三味線の人の都合や意見を聞いて、種々調整して語り物・出演順を定めるのだが、完全に出来るということはず無い。その当時のプログラムは、御存知のとおり二枚折りで、表紙が緑か茶の政岡の人物の絵が白ヌキになったもので、中に四日間の語り物・出演者が毛筆体で印刷されているのだが、その字を書くのが千住大橋の大森という書版屋さん。五日か六日には原

稿を届けるのだが、これは渡して、書いてしまったら修正がきかないから、駅や、大森さんの近くのコーヒー屋で電話をかけることもしばしば、その書版は翌日の午前中には北千住駅スタグの横山印刷に届き、夕方に刷り上がると、これ又、隣りのコーヒー屋で、番組と切符を封筒に入れ、出演者に発送する。十日頃には新聞社・招待者・これはというお客さんに郵送する。両方合わせて五百枚位、残り三百は当日用である。

かくして初日を迎えるのだが、私は木戸に座ってモギリ兼呼び込みをする。当時は表で「ウーン女義か」などと考えている人や、ブラブラ歩いている人に声をかけると結構入ってくれたものである。合間に出演者・語り物の変更を書いて掲示したり、大入りだとお膳送りをお願いしたりする。中入りになると木戸を閉めて、アガリを計算し、出演者切符の精算をするが、四日の日は大変で、集計と共に、席亭・箱屋さん他の支払い、そしてワリ(出演料)を算出し、封筒に入れてお渡しする。これを一時間のうちに片づける。師走の忠臣蔵の時は、いつもの二倍の忙しさと手間がかかる。この印刷は高野さんが作って御志贈りいただくのであるが、初め原稿からメチャメチャに変わるといふ代物、高野印刷の皆さんにあきれられたものである。十一月末には新小松の二階で全部の弾き合わせをするが、例年欠席者も無くキッチリ行なわれた。当時は、あの狭い楽屋もいっぱい、客席もいっぱい、誠に活況であった。

人間国宝

土佐廣師に聞く

大変長い年月がございまして、あまり定かではございませんが、覚えております限り、お話を致します。

そもそも二代目綾之助さんが、御一門と本牧亨で会をなさっていらっしゃるうち、女義連中も協力して出演することになり、多勢でメンバーは(順不同、敬称略)重之助、越駒、越道、綾華、綾之助、佳照、弥周、住若、重子、素八、三味線は猿幸、三生、津賀昇、駒登久、清一、仙廣、住竜、猿清、猿玉。私は藤組でした。他に桐組、小津賀、朝重。竹組、重之助、糸三。梅組、越駒、越道。他に松組もあり、多勢の方がいらっしゃいました。

そもそも大阪で女義が、忠臣蔵の七段目をかんどしをつけたら、赤い物を身につけたりして華やかに演じ、お客様が喜んで下さったの思い出して、東京でも、暮に必ずやりましょうと、二代目綾之助さんとお話し合いました。決まった事だと覚えてます。ずいぶん反対もございましたが、大阪での経験を生かして私がかんばり続けたと記憶しています。

私はよく、四段目とか、平右衛門とか、又、小津賀さん、越駒さんと三人侍をぶざけてやり、お客様に喜んで頂いたり、天地会で、太夫が三味線、三味線弾きの方が語りました。中でも猿幸さんが、由良之助だの、おかるだの、真面目にお稽古してなされた事もありま

す。とにかく十二月は忠臣蔵の通しを続けてきました。

四段目につきましては、判官が真正直が為に上使に対しての無礼という形で切腹する事になり、頭の中では、口惜しい、残念無念の気持ち一杯なのに、現実には切腹しなければならぬという、悲しいとも怒りの心境を出すのに苦勞致しました。品格も充分必要で、由良之助に逢うまでの、お腹を切った後なので、口の中で言うセリフは、大変苦勞致しました。

大阪では、団路さんという方がいらして、大変可愛がって下さいました。京都、神戸、北海道へと、三味線を弾いていただき旅興行を致しましたが、東京よりお招きをうけて、初回はパティ館で語りました。昔は、芸も年令も皆さん並んでいたもので、良きライブルとして一所懸命芸を競い合う事が多くて、勉強になりました。

猿幸さんとは、芸の上の事で喧嘩もして、口もさかずにいきなり放送局に行き、録音した事もあります。常々お互いの息がわかってるので、とうとうそのまま最後まで語りました。(昭和三十四年十月「壺坂」)

五十八年の秋、三生さんが弾いて下さった酒屋が大変良く合って、気持ちよく語る事ができました。

誠にお名残り惜しうございますが、本牧亭様には長い間女流義太夫を見守って下さった事を、厚く御礼申し上げます。

(聞き手 竹本朝重・竹本土佐恵)

'90都民芸術フェスティバル

邦楽演奏会

— 第20回記念 —

*平成二年三月三日(土)

昼の部 12時半 夜の部 4時半

*朝日生命ホール(新宿駅 西口)

*東京都助成による特別料金 一、五〇〇円

邦楽連合会(義太夫・清元・古曲・新内・常磐津・長唄・三曲)主催の年一回の邦楽演奏会が回を重ねて20回、今年も20回記念名曲特集です。(注・会場がいつもと違います)

義太夫「鳴門」「野崎村」

清元「神田祭」「三千歳」

河東「邯鄲」 一中「熊野」

新内「明烏」「蘭蝶」

常磐津「関ノ扉」「将門」

長唄「道成寺」「勸進帳」

三曲「松竹梅」「千鳥の曲」

「鹿の遠音」「鶴の巣ごもり」

義太夫の出演は、

昼の部「鳴門」

夜の部「野崎村(段切)」

朝重・駒之助・越

悠美・多美子・駒治 輝雅・津賀寿・暁子

*お問合せ・お申し込みは 事務局まで

協会の動き

89年11月より
90年1月まで

平成元年

11月14日 ファックス・留守番電話設置

(12ページ参照)

11月20日 教師のための義太夫講習会(文化庁助成)「義太夫節と新内節」講師一景山正隆東洋大学教授(義太夫協会監事) 富士松長門太夫師が特別出演 於本牧亭

11月21日 義太夫協会公演会特別企画「特集・本牧亭ありがとう」池田弘一神田外語大学助教(義太夫協会相談役)、本牧亭のおかみさん・石井英子氏ゲスト出演(2・3ページ参照) 於本牧亭

21日 第十期歌舞伎俳優研修生・第十期竹本研修生発表会 竹本越道ほか義太夫協会役員等が指導した。

21日 平成元年度民間芸術等振興費補助金(青少年等芸術普及)交付決定通知 於国立劇場小劇場

11月24日 国立劇場(演芸場)平成2年度利用契約

11月27日 ポスター起草委員会 於事務局

27日 国立劇場「シルクロードの楽器と芸能具展」終了 さわってみましょうのコーナーに太極三味線を展示した。

11月30日 本牧亭ありがとう「素義お名残演奏会」(5ページ参照) 於本牧亭

30日 平成元年度民間芸術等振興費補助金(青少年等芸術普及)概算申請書提出

12月1日 日本放送協会平成元年度助成金交付申請書提出

12月3日 河野国声文庫(仮称)目録作成作業(12ページ参照) 於河野氏宅

12月7日 特別公演部会 国立劇場に移るにあたり、企画委員会を設置するための準備会を作ることが決定した。

12月12日 ありがとうほんもくていしりーず其の三「大正寄席」に竹本駒龍・鶴澤駒登久出演 於本牧亭

12月14・15・16日 女流後継者育成事業 春の富士研修 指導一野澤喜左衛門

師 於国立劇場

12月20日 第19回心身障害児のための特別公演(NHK厚生文化事業団共催)

(沢山の御客様のおかげで無事終了致しました。詳細は次号にて御報告させていただきます。どうも有難うございました。)

12月21日 「女流義太夫演奏会」本牧亭から国立演芸場へ移ることについての報道関係説明会 於ほんもくてい

21日 本牧亭お別れ公演 前日と二日にわたり「仮名手本忠臣蔵」を演奏した。席上、第五回豊澤仙広賞が

12月26日 本牧亭より国立劇場演芸場への引越作業。

平成2年1月1日 義太夫協会会報47号発行

義太夫協会会員名簿'90

高野俊雄常任相談役が、国立劇場進出を祝って義太夫協会会員名簿'90を御寄贈下さる事になりました。平成二年一月二十一日(日)国立演芸場でのお初公演当日会員ならびに御関係各位にお手渡しすべく只今印刷・製本中です。
新しく名簿が出来ますので、今号では新入会員御紹介・住所変更等は省略させていただきます。

本牧亭

ありがとう(三)

「きっと泣いてしまう……」と言いつつ、後には、思ったよりあっけなく本牧亭最後の女義公演の日は過ぎてしまいました。業屋は、忠臣蔵総出演でせわしなく動きっぱなし、客席も、二百人もの御客様の熱気でしんみりする暇がなかったからかもしれせん。けれども、田辺会長の本牧を去る御挨拶、仙廣賞授与式ではちよっとしんみり。そして



長い間本当に有難う
中村勝太郎さん 吉川名誉会長

下足の中村さん、ピラ字の久井田さん、売店の高瀬さん、それから本牧継続の蔭にこの人あり、全面的にお世話になった支配人の岩崎さん、四人の従業員の方に記念品を受けて頂いた時もちよっとホロリとしました。最後に「国立で会いましょう」と長老・豊澤猿三郎師の音頭で手締をして本牧亭に別れを告げましたが、挨拶を交わす人々、記念写真を撮り合うグループがいつまでも残っていました。松竹株式会社社長・永山武臣様、八王子車人形西川古柳様、立派なお花を有難うございました。

演芸場を満席にする法

— 吉川名誉会長の御挨拶より —

本牧亭で一番忘れられないのは、舞台で釈台の前に、人間国宝・土佐廣さんの肩衣を拝借して、竹本義太夫の生涯についてお話ししたことでした。

今日は超満員ですが、これで喜んではいられません。今晚の倍来てもらわなければ、国立演芸場は満員にはなりません。しかし、それは何でもない易しいことなんでありまして、皆さんが誰方か一人お連れになればいいことになる訳であります。二人以上は要りません。補助椅子を出すのは面倒ですから(爆笑)。皆さんをもっと引張って来て頂きたい。自分が来られない時は代理を送って頂きたい。国立演芸場を満員にするにはお客様をやることであります。どうぞ宜しくお願い致します！
(一部抜粋)



国立で会いましょう (撮影 佐藤公夫氏)

ユーモアたっぷり、しかも心のこもった熱弁に場内は笑いの渦に包まれました。次頁の公演予定表を皆様の御予定として頂ければ幸甚でございます。

会費納入時に差し上げる「義太夫協会公演会御招待券」は国立演芸場でも有効です。お誘い合わせお出かけ下さい。

ファックスと留守番電話



ファックス番号 当面は電話と共用

河野国声常任相談役の御寄贈によって昨年十一月末日よりファックスと留守番電話ができました。これは、ファックスが設置された日、使い初め第一号、河野国声常任相談役に送信したものです。事務所でのんなにうれしかったかが想像されるようなファックス原稿(1?)ではありますが、国声先生は「妙なのが届いて驚いたヨ。役に立つといいね」とおっしゃって下さいました。

早速威力を発揮してくれていますが、まだそれほど使用頻度が高くありませんので、当面は専用回線は引かず、電話と共用にいたします。ファックスも(五四一)五四七一です。併せて、留守番電話も御利用下さいますようよろしくお願い申し上げます。

義太夫教室OB演奏会

本牧亭での女流義太夫定期演奏会より二年早く始まった義太夫教室は、現在第42期生が受講中です。卒業発表会を兼ねたOB演奏会を今年も行ないます。

本牧亭が初席をもって閉鎖されるため、広い会場に移りました(五一〇席)。ウィークデイですので今から御予定下さいますようお願い申し上げます。

- ◇平成2年3月28日(水)11~8時(予定)
- ◇東京都勤労福祉会館ホール
- ◇中央区新富1-13-14(八丁堀下車)
- ◇出演費 一舞台 20分 一、二、〇〇〇円
- 30分 二、〇、〇〇〇円

- *別に床世話料 一人 一、〇〇〇円
 - (見台・肩衣使用料を含みます)
 - *師匠への謝礼は各自による
- 出演のお申し込みは、お早く!

職員(パート)急募!

事務局の仕事を手伝って下さる方を募集しています。月々金のうち二日でも三日でも可。時給一六五〇円 交通費一全額支給 年令・性別不問。出来れば古典芸能に興味をもつ若い方歓迎!

詳細は (五四一)五四七一まで

〈寄贈〉

国立劇場資料課様

- シルクロードの楽器と芸能具展図録 1部
- レコード目録義太夫の部 2部
- 公演記録資料目録(視聴覚資料篇) 1部
- 高野 俊雄様
- 師走公演(仮名手本忠臣蔵)プログラム・切符 約一年分
- 国立演芸場公演 ポスター
- (右の印刷一切を御寄贈頂きました)
- 河野 国声様
- 床本・稽古本・カセットテープ 多数

(国声氏秘蔵の貴重な資料をすべて義太夫協会に御寄贈下さいました。リストを作って会員の研究に役立てて欲しいとの御意向です。12月3日、第一回の整理作業に伺いました。)

ファックス 1台

留守番電話 1台

国立演芸場内設置収納棚 1式

計 報

■鶴澤 清三郎(元正会員)
平成元年11月17日逝去 享年92才
御冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

この間出たばかりなのに又々出ました47号、本牧女義最終日の様子をお伝え出来たのもファックスのおかげです。実は締切に大幅に遅れた〇〇さんの原稿もファックスで届いたので。今年もファックス元年・国立女義元年に! どうぞよろしく。